

スペイン・モンドラゴン企業体から学べること ～アリスメンディアリエタの思想をもとに～

外国語学部イスパニア語学科 3年 加藤純子

1990年以降、グローバル化がますます進み、新自由主義によって、競争がよりいっそう激化した。その結果、先進国と途上国の間に格差や大きな溝をつくってしまった。それは世界の人口の20%を占める先進国の人々が世界の富の90%を手にし、世界の20%を占める最貧国の人々は世界の富の0.2%しか利用していないということからもよくわかる。

そして、この新自由主義のグローバル化は、先進国と途上国の格差を拡大するのみならず、日本でも「格差社会」、「ワーキング・プア」、「ネット難民カフェ」などの言葉がはやりだしたように、多くの先進国の中でも新しい貧困と格差が広がり大きな問題になりつつある。

一方でこれに対抗するように、近年、ヨーロッパや北アメリカの国々では、雇用の創出やコミュニティの質の向上をもたらすと期待されている社会的協同組合、コミュニティ協同組合、生産協同組合、労働者協同組合などと呼ばれるような様々な協同組合の活動が顕著になってきており、われわれはこの動きに注目すべきである。これらの新しい動きの中心となっている協同組合はいずれも、働く人自身が、協同出資・協同経営・共同労働を行って運営する事業体のことである。この新しい動きは、生活協同組合や農業協同組合といった伝統的協同組合、信用金庫のような協同組織金融と協力関係あるいは相互支援関係の中で、発展してきている。しかしながら、日本においては他の先進国と違って、労働者協同組合の法制化さえなされていないなど、まだまだ遅れをとっているのが現状であり、われわれはヨーロッパの経験から学ぶ必要がある。

そこでスペインの北東、バスク地方一帯に展開するモンドラゴン協同組合企業体(MCC)の活動に注目してみる。モンドラゴンの実践は、生産協同組合を軸に、様々な種類の協同組合が有機的に結合しコミュニティを主導する実践例として大きなインパクトを世界に与えたものであった。しかし問題の関心がもっぱらモンドラゴンの実践を可能にしたその固有の制度や歴史的につくり出された特殊な仕組み、バスク地方の民族的、文化的特殊性やモンドラゴンの地域的特性に向けられたのは否めないであろう。

そこで私はこのモンドラゴン協同組合群の創始と発展に大きく貢献したドン・ホセ・マリア・アリスメンディアリエタというカトリックの神父の思想をもとに、モンドラゴン協同組合事業体について歴史から遡り、再検討し、モンドラゴンの実験によって日本が学ぶべきところがあるのではないかと考える。